
◆ 本調査の特徴

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」は、英語コミュニケーション能力テスト(GTEC for STUDENTS)と生徒アンケート、教員アンケートによって、東アジア(今回は日本・韓国)の英語教育の実態を把握し、課題を明らかにしようとするものである。また、本調査は、「東アジア高校英語教育調査」(2003年度)、および、「東アジア高校英語教育GTEC調査」(2004年度)の継続調査として2006年度に実施している。

本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

1. 高校生の英語コミュニケーション能力と、学習・指導の実態との関係性がみえる

英語コミュニケーション能力テスト(GTEC for STUDENTS)と生徒・教員へのアンケートを併せて分析することで、高校生段階の英語コミュニケーション能力の実態を探るとともに、その能力と学習状況や意識、授業方針などとの関係性を探ろうとするものである。

2. 東アジア(今回は日本・韓国)の英語教育の実態の違いがみえる

本調査は、絶対評価(スコア型)のテストを用いた国際調査としては大規模なものである。また、英語を外国語として学ぶ東アジアの国である韓国でも実施することで、両国の英語教育の実態の違いを把握すると共に、他国の事例から日本の英語教育を考える示唆を得ようとするものである。

3. 経年比較により英語コミュニケーション能力および英語教育の実態の変化がみえる

本調査では、絶対評価のテストを用いることで、過去のテスト結果(2003年度、2004年度)との直接比較が可能となっている。アンケートについても過去の調査との共通項目については比較が可能である。また、2006年度調査は、アンケートの調査項目の一部見直しを行い、今後起こりうる変化について将来的に現在のデータとの経年比較が可能になるよう考慮した調査内容となっている。

◆ 調査概要

1. 調査テーマ

東アジアの2カ国(日本・韓国)における高校生の英語コミュニケーション能力と学習習慣や意識、英語使用状況や教員の指導方法の調査から、両国の英語教育の実態を把握し、課題を明らかにする。

2. 調査時期

日本：2006年7月～2007年1月

韓国：2006年9月

3. 調査対象

	学校数(校)	教員(人)	生徒(人)		
			高1	高2	合計
日本	10	65	2,205	1,495	3,700
韓国	5	43	2,042	1,977	4,019

<地域>

日本：北海道、山形県、埼玉県、千葉県、岐阜県、兵庫県、鹿児島県

韓国：ソウル市、慶尚北道(浦項市)

●経年(2003—2006年度)調査対象*

<日本>

	学校数(校)	教員(人)	生徒(人)		
			高1	高2	合計
2003年度	5	22	771	470	1,241
2006年度	5	30	707	549	1,256

<韓国>

	学校数(校)	教員(人)	生徒(人)		
			高1	高2	合計
2003年度	5	37	2,043	2,000	4,043
2006年度	5	43	2,042	1,977	4,019

*日本・韓国共に、2003年度「東アジア高校英語教育調査」および2006年度「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」に継続してご協力いただいた学校。ただし、日本においては2003年度調査と2006年度調査に継続してご協力いただいた6校のうちSELHi指定校(文部科学省が指定するスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール)であった1校を除いた5校を経年調査対象校とした。

4. サンプルの抽出方法

調査対象校については、以下2点を必要条件として抽出した。

- 1) 学校全体として、4年制大学への進学を目指す指導を行っている高校であること
- 2) 原則的にGTEC for STUDENTSを校内で学年全体として一斉受検していること

※本調査結果は、上記の条件などをもとに有意に抽出された学校のものであり、日本・韓国の高校英語教育全体を代表するものではないことを予めご理解ください。

5. 調査方法と調査内容

	調査方法	調査内容
①英語コミュニケーション能力調査	会場型試験 (リーディング45分+リスニングおよびライティング45分)	英語コミュニケーション能力テストであるGTEC for STUDENTSを用いて3技能(リーディング、リスニング、ライティング)を測定。(GTEC for STUDENTSについてはp.153参照)
②生徒アンケート調査	学校通しの質問紙による自記式調査	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生以前の英語学習* ・中学生時の英語学習* ・現在の英語学習 ・授業での英語活動の内容* ・教室内での英語活動に関する自己評価 ・英語圏への渡航経験と英語使用経験 ・日常での英語使用経験 ・英語学習への意識*
③教員アンケート調査	学校通しの質問紙による自記式調査	<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育の指導理念・目的 ・英語教育の方針・配慮している点

(* 日本調査のみで実施の項目)

※本報告書で使用している百分比(%)は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。また、数値表記のしかたによって、0.1ポイント前後している場合がある。

6. 関連調査

本調査は、2003年度に実施した「東アジア高校英語教育調査」および2004年度に実施した「東アジア高校英語教育GTEC調査」の継続調査として、一部項目を見直して日本・韓国2カ国で実施した。

2003年度 「東アジア高校英語教育調査」 日本・中国・韓国で実施

↓

2004年度 「東アジア高校英語教育GTEC調査」 日本・中国・韓国で実施

↓

2006年度 「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」 日本・韓国で実施

◆各章の要約

第1章 日本の高校生の家庭英語学習の実態と日常英語使用経験

生徒の学校外での実態について、家庭での英語学習と日常での英語使用経験の2点から分析、考察を行う。調査結果から、平日に宿題、予復習をほとんどしない生徒が4割、平日も休日も宿題、予復習をほとんどしない生徒が約4分の1もいることがわかった。また、家庭での英語学習の大半が「宿題と、次の授業の予習」であり、平均学習時間から推測すると、その内容が辞書引きで終わっている可能性があると考えられる。また、英語使用経験については、韓国の生徒より日本の生徒の使用経験率が低かった。さらに、使用経験を英語力別にみると、経験率には英語力の影響がみてとれる。また、日本の生徒は、英語力が高くても韓国の生徒ほどは英語を使用していないという点は課題である。これらの結果から提言として、家庭学習の時間と内容について検討が必要であること、また、英語使用経験について実際に教室外で英語を使わせるような働きかけが重要となってくることが挙げられる。

第2章 日本の高校生の英語学習に対する小中高での情意変化と動機づけ

小学校での英語活動で重きがおかれている「情意」について、小・中・高における情意の変化を探るとともに、動機づけの質的な分析を行い、情意とスキルの育成のバランスについて考察を行った。小学生段階では英語学習に対して肯定的な回答が多いが、中学生、高校生へと進むにつれて否定的な回答が増え、小学生時の肯定的な態度が失われていく傾向があることがわかった。一方、高校時に好きである生徒は、高校入学前に好きになっている傾向があり、小学生段階で育成した情意を保持することの重要性が示唆された。さらに、情意と能力の関係を見るため、能力層ごとの学習動機について分析を行った結果、能力的に高い値を示していた生徒は、コミュニケーションを取りたいという友好動機や言語文化への興味動機を持っていることがわかった。また、教室での英語学習活動との関連においては、能力の高い層では、何かをまとめて伝えるといった統合活動の認知が高いという結果が得られた。

第3章 日本の高校生の新旧課程における能力変化と教員の意識変化

教育課程の変化に伴う生徒の質的な変化や、センター試験でのリスニングテスト導入による影響をみるため、2003年度に実施した調査結果と今回の2006年度調査の結果を比較し、生徒の能力や特性の変化、教員の意識の変化について考察を行った。今回の調査結果は、限られたサンプルから得られた限定的な結果ではあるが、リスニング力、ライティング力における伸びがみられた。リスニング力の伸びの要因については教育課程の変化のみとは言えないものの、テスト結果および教員の意識調査からも、新課程生においてリスニング力が向上していることは事実と言えそうである。一方で、文法力や語彙力の低下を指摘する声も多くあり、中学からの接続を意識したリメディアル的な授業展開が今後必要となるであろうことが、示唆された。

第4章 小学生以前の英語学習経験の影響～日本の小学校英語教育の課題への考察

日本の調査結果の中から、小学生以前の英語学習経験に関する結果を分析し、日本の小学校英語教育の課題を考察する。調査対象の生徒の小学生以前の英語学習経験の特性を捉えた上で、小学生以前の英語学習経験の影響を分析した。その結果、小学生以前の英語学習経験者は、経験がない生徒に比べて、中学生時に英語が好きだった割合が高いこと、高校生段階の英語学習に対する意識も高い傾向であることがわかった。また、学校と学校外両方で学習した場合、スキル面でも効果感やGTEC for STUDENTSのスコアが高いことがわかった。これらの結果から、小学生以前の英語学習経験が、高校生段階の英語学習や英語力にプラスの影響を与えているとみることができ、今後、必修化に向けて条件整備ができれば、特に意識面での効果が期待できそうである。しかしながら、小学校英語教育の必修化に際しては、課題が多いことも事実であり、英語への関心・意欲を育てる指導を行うことはもちろんだが、中・高との一貫したカリキュラムを作成していくことが大切である。

第5章 「英語力」と「日常の英語使用経験に関する意識」の比較研究(日本・韓国) ～そこから読み取れる日本の英語教育改善への示唆

ここでは、日韓の調査結果から、両国の違いが顕著だった英語コミュニケーション能力と日常での英語使用経験を取り上げ、両国の英語教育について検討を加え、日本の英語教育改善について考察する。英語力の結果をみると、総合的には韓国が日本を上回っている。技能別にみると、韓国がリーディング、リスニングで、日本がライティングで、他方を上回っていた。その一因としては、両国における学習量の違いがあるが、総合的に韓国の高校生が英語力をつけてきているのは、韓国が国家戦略として小学校から高等学校までを見通して英語教育施策を行っていることが大きいと考えられる。日常での英語使用経験についても、韓国の生徒は日本の生徒よりも大幅に経験率が高かった。この違いについて、既存資料や専門家への聞き取り調査をもとにして、韓国の結果の背景となる社会状況を踏まえた考察を行った。日本の生徒の英語力や英語使用経験を向上させるには、国家としての英語力の到達目標を達成可能にする施策が必要である。

第6章 Impacts and Effects of Ten Years of Elementary School English Education in Korea

韓国教育人的資源部が、小学校での英語教育10年の成果分析研究(研究代表：権 五良教授)を行った。この研究に、「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」と2003年度の「東アジア高校英語教育調査」の結果が、高校生段階での英語力におよぼす効果を測る部分で活用されている。ここでは、この成果分析の全ての結果がまとめられた報告書『小学校の英語教育10年の成果分析による小・中学校英語の教育活性化方案模索』の要約を紹介し、そこからみえる英語教育への示唆を述べる。研究結果から、高校生段階の英語力では、2003年度(小学校英語

教育を受けていない)から2006年度(小学校英語教育を受けている)でGTEC for STUDENTSのスコアに45.1点の伸びがみられた。また、生徒の意識についても、生徒へのアンケート結果から、英語への興味や自信、またコミュニケーション能力についてプラスの効果を感じていることがわかった。調査結果から、韓国での小学校および中学校英語教育の改善にむけた提案を示しているが、韓国での取り組みは、文化的にも社会的にも共通点の多い日本などアジアの国々にとっても、学ぶ点は多いと思われる。

第7章 日韓高校生のライティングに関する詳細分析～答案分析を中心に

日韓の高校生の英語力において、両国の違いが特に顕著だったライティングについて、アンケートと答案の詳細な分析を行い、考察を加える。まず、韓国の生徒は、リーディング、リスニングに比べてライティングのスコアがかなり低かったことについて考察する。GTEC for STUDENTSのライティング・グレード2の答案と教員アンケートの結果から、韓国の生徒は、英語力はあるが、ライティングにおける考えの整理の仕方、文章の構成の仕方がわからないために書けないのではないかと考察した。次に、日韓のライティング・グレード4の答案分析から、両国の違いと課題について分析・考察を行った。韓国の課題は、考えの整理および構成の仕方を教えることであり、日本の課題は、一定の時間内に量を書けるようになること、よりの確に考えをまとめ文章を構成していけるようにすることが挙げられる。また、語彙の量、種類において韓国の生徒に比べて乏しい結果となったことから、日本では、発信にむけた語彙の充実が必要であると考えられる。